

LL活用の現状と今後の見通し：

LLA関西支部アンケート「LLの活用と問題点」をもとに¹

枝澤 康代

竹内 理²

佐伯 林規江

同志社女子大学短期大学部

LLA関西支部は1993年（平成5年）3月に、「LLの活用と問題点」についてアンケート調査を実施した。調査結果は1993年6月に関西支部春季大会において概略的に報告されている。著者達はその調査に当初からかわり、より精密な分析の必要性を強く感じていた。本稿はアンケート回答の素データをもとに、再集計と分析を行い、関西地域におけるLLの活用状況とこれからのLLのあるべき方向をさぐるものである。

はじめに：

LL（Language Laboratory）は、1940年頃からアメリカで本格的に外国語教育に使用されるようになり、折りからの構造言語学と行動主義心理学の理論に基づいたオーディオ・リングル・メソッドの波に乗って、急速に広まった。日本にも1950年代にオーディオ・リングル・メソッドと同時にLLが導入され、まず大学に広まり、次第に高校、中学でも使われ始めた。しかし、LL用の指導法や教材が十分でない、使い手が移動して次の使い手がいないなどの理由で、LLは十分に活用されず埃をかぶる結果となるものが少なくなかった。

その後、新しい外国語教授法が次々と提唱され、より実際に近いオーセンティックな言語活動の場を提供する必要性が指摘されるようになった。一方、コンピュータや電子工学の急速な発達にともなって、LLは音声だけでなく映像も提示できるようになり、多様な言語活動の提供が可能になった。多くのLL活用例が報告され、教材も多種開発されるにしたがって、LLが見直されるようになった。現在では、LLは大学レベルでは80%に導入されている。しかしながら、中学・高校レベルでは30%しか普及していない（竹内・三根他、1994）。

LLは改良されてきたが、まだいろいろな問題を持っている。操作が複雑すぎる、機能が限定されている、高額である等々の問題が指摘されている。一方では、コンピュータの普及により、LLの形態が急速に変化し、教師はそれに対応する必要に迫られている。アメリカでは1988年にIALL（The International Association for Learning Laboratories）がその会員を対象にアメリカにおけるLLの現状調査（Trometer, 1989）を行った。Lawrason（1990）は、そのデータを分析し、LLは従来の伝統的な音声指導の機器としてだけでなく、より柔軟な利用のできるLanguage Resource Centerとなっ

ていることを指摘している。日本においてもＬＬはそのような方向に進むのであろうか？

ＬＬに興味のある教師は学会や講習会等でＬＬ製造メーカーと接触し、個人的にいろいろな意見は伝えているが、その意見が十分に反映されていないのではないかという声も聞かれる。またＬＬはメーカー主体で開発され、操作性においても機能性においても、ユーザーである教師には使いにくいものになっているとの意見もある。これらの意見は一部の片寄った意見であるかも知れない。しかし、少なくとも、メーカーとユーザーが協同して、同じ認識の上で、新しい時代に対応した新しいＬＬを求める努力をすることが重要であることを示している。

そこでＬＬＡ関西支部では、外国語教育にＬＬをどのように活用しているか、どのような問題があるか、今後どのような開発が必要かについて、教育現場の声を聞き、メーカーと対話する機会を計画した。それは 1993 年（平成 5 年）6 月 5 日（土）に「ＬＬＡ関西支部平成 5 年度春季研究大会・総会」のテーマ、「ＬＬの活用と問題点：メーカーとユーザーとの対話」として実現したが、そのための基礎資料として、ＬＬＡ関西支部会員と関西地域のＬＬ導入校を対象に、「ＬＬの活用と問題点」についてのアンケート調査を行った。

調査目的：

調査の目的は次の 3 つである。すなわち、1) 関西地域の教育機関がどのようにＬＬを使用し、どのような問題をかかえ、どのようなＬＬを希望しているかを知ること、2) コンピュータの導入にＬＬはどのように対応すべきかを探ること、3) ＬＬのユーザーとメーカーとの対話の土台及び共通認識の場を提供することである。その目的に従って、調査項目を次の 6 点に限定した。

- I. どのようなＬＬ機種を導入しているか
- II. どのようにＬＬを使用しているか
- III. ＬＬの使用頻度はどの程度であるか
- IV. ＬＬの機能についての利用度、改善点はなにか
- V. コンピュータ導入についての現状と問題点はなにか
- VI. 今後のＬＬについての夢はなにか

調査方法：

アンケートの回答方式は基本的に記述式とし、できるだけ自由な意見を求めることにした。質問状の配布と回収は郵送によって行った。送付状には切手を張った返信用封筒を同封し、できるだけ多くの回答を回収できるように配慮した。配布対象はＬＬＡ関西支部会員 350 名、及びメーカーより資料提供のあったＬＬ導入校 173 校である。実際の配布数はＬＬＡ会員とメーカー推薦の重複を除いた 454 校であった。

調査は 1993 年 3 月 25 日から 4 月 16 日の間に行われた。回答回収数は 61 であり、回収率は 13.4 % であった。回答の内訳は次の通りである。なお便宜上、本調査では大学、短期大学、高等専門学校、専門学校を含めて、大学と分類し、高校と中学を併せて中高と分類することにする。

LL活用の現状と今後の見通し

回答数	教員	職員	計
大学			
4年制大学	12(19.7%)	12(19.7%)	24(39.3%)
短期大学	9(14.8)	3(4.9)	12(19.7)
高等専門学校	1(1.6)	—	1(1.6)
専門学校	1(1.6)	—	1(1.6)
小計	23(37.7)	15(24.6)	38(62.3)
中高			
高等学校	13(21.3)	—	13(21.3)
中学校	5(8.2)	—	5(8.2)
小計	18(29.5)	—	18(29.5)
不明			5(8.2)
総計			61(100%)

調査結果と分析：

回答のあった 61 校のうち、LLを導入していない学校が1校あり、また、各項目は重複回答や無回答があった。したがって、各項目での実回答校数を示し、そこに示される特徴を分析することにした。

なお、項目Ⅰ. からⅢ. までは、教育機関が不明である5回答を除いて集計処理を行ったが、Ⅳ. からⅤ. まではすべての回答を対象に集計分析を行った。

Ⅰ. どのようなLL機種を導入しているか

Ⅰ-1. 導入年次（回答 55 校）：

	1966-1979	1980-1984	1985-1989	1990-1993	計
大学	3(5.5%)	3(5.5%)	13(23.6%)	15(27.3%)	34(61.8%)
中高	1(1.8)	—	1(1.8)	14(25.5)	16(29.1)
不明	1(1.8)	—	2(3.6)	2(2.6)	5(9.1)
計	5(9.1)	3(5.5)	16(29.1)	31(56.4)	55(100%)

1990 年以降に新規に、あるいは入れ替えてLLを導入したと回答したのは 55 校中 31 校で、全体の 56.4% であった。大学レベルと中高レベルの導入率に差はないが、中高の中でだけでは 87.5% であり、このことは中高レベルでLL導入が最近多くおこなわれていることを示している。

1 - 2. 機種名 (1990 年以降に導入した 31 校について) :

	アカイ	ナショナル	ソニー	ビクター	計
大学	1(3.2%)	6(19.35%)	7(22.6%)	1(3.2%)	15(48.4%)
中高	2(6.5)	6(19.35)	3(9.7)	3(9.7)	14(45.2)
不明	1(3.2)	-	1(3.2)	-	2(6.4)
計	4(12.9)	12(38.7)	11(35.5)	4(12.9)	31(100%)

1 - 3. 操作のタイプ (1990 年以降に導入した 31 校について) :

	タッチスクリーン	ペンライト	スイッチ	計
大学	5(16.1%)	7(22.6%)	3(9.7%)	15(48.4%)
中高	2(6.5)	9(29.0)	3(9.7)	14(45.2)
不明	1(3.2)	-	1(3.2)	2(6.4)
計	8(25.8)	16(51.6)	7(22.6)	31(100%)

機種は全体では先発メーカーが優位を占めているように見えるが、大学／中高に分類してみるとメーカー間の差はない ($\chi^2 = 4.1$, ns.)。タッチスクリーン、ペンライト、スイッチの方式の違いも差はない。

1 - 4. 周辺機器について (回答 48 校) : 重複回答

平均周辺機器数：	大学 = 7.6台	中高 = 5.9台
最もよく使用する 3 周辺機器：	大学(33校)	中高(15校) 計(48校)
ビデオ	33(68.7%)	14(29.2%) 47(97.9%)
教材提示装置	20(41.7)	8(16.7) 28(58.3)
カセットテープ複写機	9(18.7)	7(14.6) 16(33.3)
LD プレーヤー	9(18.7)	2(4.2) 11(22.9)
カセットデッキ	5(10.4)	1(2.1) 6(12.5)
アナライザー	4(8.3)	2(4.2) 6(12.5)
OHP	2(4.2)	2(4.2) 4(8.3)
ビデオテープ複写機	2(4.2)	1(2.1) 3(6.3)
パーソナルコンピュータ	1(2.1)	1(2.1) 2(4.2)
ビデオプロジェクター	1(2.1)	1(2.1) 2(4.2)
ビデオキャプション	1(2.1)	1(2.1) 2(4.2)
方式変換ビデオ	1(2.1)	- 1(2.1)
チューナー	1(2.1)	- 1(2.1)
スライドプロジェクター	1(2.1)	- 1(2.1)

最もよく使用する周辺機器の上位3機器は、全体ではビデオ(97.9%)、教材提示装置(59.3%)、カセットテープ複写機(33.3%)であり、LDプレーヤー(22.9%)が次位であった。カセットデッキについては、本来なら最もよく使用する周辺機器の最上位にあげられるはずであるが、12.5%しか回答がなかった理由として次のことが考えられる。すなわち、カセットデッキはLLマスターコンソールに当然のように組み込まれているので、周辺機器というよりもLL本体であると認識され、回答者は特に名前をあげなかった場合が多いのではないかとと思われる。

II. どのようにLLを使用しているか

II-1. LL使用教科名(回答53校): 重複回答

教科名	大学(37校)	中高(16校)	計(53校)
英語、英語演習、教養英語	19(35.8%)	11(20.8%)	30(56.6%)
リスニング、LL, LL演習	17(32.1)	4(7.5)	21(39.6)
スピーキング	14(26.4)	4(7.5)	18(33.9)
発音、音声学	11(20.8)	-	11(20.8)
他外国語	10(18.9)	-	10(18.9)
通訳法、通訳練習	3(5.7)	-	3(5.7)
作文	3(5.7)	-	3(5.7)
技術工学	-	1(1.9)	1(1.9)
教科教育法、	1(1.9)	-	1(1.9)
その他(大学): 国際文化学部専門科目、劇文学、米文学史、 海外英語実習、資格英語演習、欧米文化論演習			

LLを使用している教科については、全体では、上位3科目は、英語(56.6%)、リスニング(39.6%)、スピーキング(33.9%)であり、大学、中高ともにこの3科目でLLを最も使用しているが、その他の教科には、どのレベルの学生を対象とするかによって、内容に差が現れている。すなわち、中高ではほとんど英語科目のみでLLが使われており、大学では広範囲の教科でLLが使われている。

II-2. LL使用目的(回答50校): 重複回答

目的	大学(34校)	中高(16校)	計(50校)
リスニング訓練	32(64.0%)	15(30.0%)	47(94.0%)
スピーキング訓練	16(32.0)	7(14.0)	23(46.0)
発音訓練	12(24.0)	1(2.0)	13(26.0)
文化理解	2(4.0)	1(2.0)	3(6.0)
文型練習	2(4.0)	1(2.0)	3(6.0)
テスト	2(4.0)	-	2(4.0)

作文練習	2(4.0)	-	2(4.0)
通訳練習	2(4.0)	-	2(4.0)
ビデオ鑑賞	1(2.0)	1(2.0)	2(4.0)
総合的英語理解	1(2.0)	1(2.0)	2(4.0)
読解訓練	1(2.0)	1(2.0)	2(4.0)
その他(大学) : 教職課程、英国演劇理解、英検/TOEFL、図書館員養成 (中高) : ディクテーション、語彙、情報処理			

使用目的についても、全体では、圧倒的にリスニング(94.0%)とスピーキング(46.0%)訓練に使用されているのがわかる。しかしその他を見ると大学レベルと中高レベルでは、ニーズに違いのあることが示されており、LLは多様なニーズを抱えていることがわかる。また、現調査では、中高レベルで1校だけ「技術工学」科目で情報処理教育のためにLLを使用しているが、今後LLに広くコンピュータが導入され、インターネット等の通信がもっと自由に使えるようになると、LL使用形態も変化するであろう。例えば、コンピュータ・ネットワークを通して得た情報をもとに授業を展開することが増えると予想され、その時には、LLの使われ方に更に多様なバラエティが加わることになるであろう。

II - 3. LL使用方法(回答49校) : 重複回答

方法	大学教員(21校)	大学職員(13校)	中高(15校)	計(49校)
ビデオ	20(40.8%)	13(26.5%)	9(18.4%)	42(85.7%)
オーディオテープ	19(38.8)	11(22.4)	8(18.2)	38(77.5)
市販教材	4(8.2)	-	2(4.1)	6(12.2)
LDプレーヤー	-	3(6.1)	3(6.1)	6(12.2)
教材提示	1(2.0)	2(4.1)	1(2.0)	4(8.2)
インターコム	-	3(6.1)	-	3(6.1)
テキスト	2(4.1)	-	-	2(4.1)
アナライザー	1(2.0)	-	1(2.0)	2(4.1)
プリント	1(2.0)	-	1(2.0)	2(4.1)
キャプション	1(2.0)	-	1(2.0)	2(4.1)
リズムボード	1(2.0)	-	-	1(2.0)
パーソナルコンピュータ	-	-	1(2.0)	1(2.0)

* この項目において大学教員と大学職員に分類したのは職種によってLL使用方法に違いがあるかを調べるためである。

使用方法では、どのような機器をどのように使用するかを尋ねたが、当然のことながら、全体ではビデオ(85.7%)とオーディオテープ(77.6%)が最もよく使用されている。個々には大学教員、大学職員、中高教員それぞれに違いがあり、職種や職制によってLLの使い方が異なることがわかる。

III. LLの使用頻度について

III-1. 週当たりの使用頻度（回答50校）：

頻度／週	大学(35校)	中高(15校)	計(50校)
0－5回	13(26.0%)	8(16.0%)	21(42.0%)
5－10回	3(6.0%)	1(2.0%)	4(8.0%)
11－15回	5(10.0%)	3(6.0%)	8(16.0%)
16－20回	4(8.0%)	1(2.0%)	5(10.0%)
21回以上（最高131回）	10(20.0%)	2(4.0%)	12(24.0%)

週当たりのLLの使用回数については、5回以下という低使用が全体の42.0%を占めている。しかし、21回以上使用する学校も、大学レベルでは20%、中高レベルでは少数であるが4%あった。大学では外国語大学系に100回を超える使用頻度のものがあるが、文系の大学や短期大学にも30回以上の高使用頻度の学校が数校見られた。

III-2. LL使用教員数（回答51校）：

LL使用教員数：	大学(36校)	中高(15校)	計(51校)
0－5人	12(23.5%)	11(21.6%)	23(45.1%)
6－10人	8(15.7%)	3(5.9%)	11(21.6%)
11－15人	8(15.7%)	1(1.9%)	9(17.6%)
16－20人	2(3.9%)	-	2(3.9%)
21－120人	6(11.8%)	-	6(11.8%)
外国語担当教員数：	大学(35校)	中高(15校)	計(50校)
0－5人	12(24.0%)	11(22.0%)	23(46.0%)
6－10人	4(8.0%)	3(6.0%)	7(14.0%)
11－15人	4(8.0%)	1(2.0%)	5(10.0%)
16－20人	1(2.0%)	-	1(2.0%)
21－50人	9(18.0%)	-	9(18.0%)
51－370人	5(10.0%)	-	5(10.0%)

LL使用教員が5人以下の学校が全体の45.1%あった。レベル別に見てみると、5人以下が中高では73.3%あり、大学でも33.3%ある。このことは、LLがまだ十分に使用されているとは言えない状態にあることを示している。外国語担当教員に対するLL使用教員の割合が50%以下の学校は全体で34%であったが、LL使用教員数が外国語担当教員数を越えている学校が18%あった。このことは、LLが外国語以外の教科や教員にかなり使用されていることを示すものであり、注目する必要がある。

III - 3. 助手の有無(回答 52 校) :

助手	大学(36校)	中高(16校)	計(52校)
常にいる	5(9.6%)	1(1.9%)	6(11.5%)
年度始めに数回つく	-	-	-
必要時につく	7(13.5)	-	7(13.5)
つかない	21(40.4)	15(28.8)	36(69.2)
教科により異なる	3(6.1)	-	3(6.1)

助手の有無については、「つかない」が全体の 69.2% を占め、中高だけで見ると、93.7% の LL に助手はついていない。これは、LL の使用がほとんど担当教員のみに任せられていることを示しており、教員の負担増になっていることは否定できない。今後 LL が有効に活用されるためには、人的なサポート体制が必要であろう。

IV. LL の機能について

IV-1. 役に立つ上位 3 機能(回答 48 校) : 重複回答

機能	大学教員(21校)	大学職員(13校)	中高(14校)	計(48校)
カセットテープ複写機	6(12.5%)	5(10.4%)	7(14.6%)	18(37.5%)
ペアワーク	8(16.7)	1(2.1)	1(2.1)	10(20.8)
ビデオ	4(8.3)	1(2.1)	5(10.4)	10(20.8)
アナライザー	4(8.3)	3(6.3)	3(6.3)	10(20.8)
モニター	3(6.3)	2(4.2)	4(8.3)	9(18.8)
教材提示機	4(8.3)	1(2.1)	3(6.3)	8(16.7)
リピート機能	4(8.3)	2(4.2)	-	6(12.5)
インターコム	3(6.3)	2(4.2)	1(2.1)	6(12.5)
カセットテープ	3(6.3)	1(2.1)	1(2.1)	5(10.4)
C・キャプション	2(4.2)	-	2(4.2)	4(8.3)
強制録音	2(4.2)	1(2.1)	1(2.1)	4(8.3)
個別テレビ	1(2.1)	-	3(6.3)	4(8.3)
リモートコントロール	1(2.1)	2(4.2)	1(2.1)	4(8.3)
モデルボイス	2(4.2)	1(2.1)	-	3(6.3)
プリンター機能	-	2(4.2)	-	2(4.2)
その他：大学教員：キュー信号、方式変換ビデオ、ビデオカメラ LD プレーヤー、ブース・マイクロフォンの切り替えスイッチ 大学職員：AA モード、外部入力、ビデオ複写機、マイクオフ機能 中高教員：Edit 機能、テープ速度調節、パソコン				

役に立つ上位 3 機能については、全体ではカセットテープ複写機が 37.5% と最も高

く評価され、続いてペアワーク、アナライザー、ビデオが各 20.8% であった。大学教員、大学職員、中高教員に分けてみると、役に立つ機能についての認識にばらつきがあるようにみえるが、上位 4 機能間でカイ二乗検定をおこなうと $\chi^2 = 7.926$ (df=6, ns) であり、統計的には機能とユーザーの間に有意差がないことがわかった。

しかし、大学教員では、役に立つ機能はペアワーク、カセットテープ複写機が上位 2 位をしめ、次にビデオ、教材提示装置、アナライザー、リピート機能が同数で並ぶのに対し、大学職員では、カセット複写機、アナライザーの次にはリピート機能、モニター、インターコム、プリンター機能、リモートコントロールがあげられた。さらに中高教員では、テープ複写機、ビデオ、モニターの順であった。このことは、当然ながら、教える対象、仕事の内容によって必要とする LL 機能に違いがあることを示している。役に立つ理由としては以下のことがらがあげられた。

- カセットテープ複写機：時間の節約、授業と同時進行が可能、家庭学習に有効
 ペアワーク：自由な組み合わせでスピーキング練習ができる
 アナライザー：時間短縮が可能、選択テストに便利、データ処理の簡素化
 ビデオ：視覚からの理解、楽しく学習、教材が豊富

IV-2. 日頃使わない・無くても良い上位 3 機能（回答 34 校）：重複回答

機能	大学教員(17校)	大学職員(10校)	中高(7校)	計(34校)
アナライザー	8(47.1%)	5(50.0%)	3(42.9%)	16(47.1%)
ペアワーク	7(41.2%)	4(40.0%)	4(57.1%)	15(44.1%)
カセットテープ複写機	5(29.4%)	-	-	5(14.7%)
Edit機能	2(11.8%)	2(20.0%)	-	4(11.8%)
OHP	2(11.8%)	-	1(14.3%)	3(8.9%)
16mm 映写機	2(11.8%)	-	-	2(5.9%)
列別教材送出機能	2(11.8%)	-	-	2(5.9%)
ビデオ	2(11.8%)	-	-	2(5.9%)
イジェクトロック	-	2(20.0%)	-	2(5.9%)
モデルボイス	1(5.9%)	1(10.0%)	-	2(5.9%)
教材提示装置	1(5.9%)	-	1(14.3%)	2(5.9%)
コールボタン	1(5.9%)	1(10.0%)	-	2(5.9%)
その他: 大学教員:	通訳機能、スライドプロジェクター、グループ機能			
大学職員:	パソコン、リモート、Uマチック、外部入力、オートスキャン、ヘッドセット			
中高教員:	レスポンス、AVスイッチャー、音声分析、オールコール			

日常に使わず、無くてもよいと思われる機能については、全体では、アナライザーと

ペアワークが 45.9% であり、次位はカセットテープ複写機 (13.5%)、Edit機能 (11.8%) であった。上位 2 機種にユーザー間の差はみられなかった。

使わない理由として次のようなことが述べられた。

- ・ アナライザー：操作が複雑、反応が遅い、授業形態とあわない、少人数クラスには不要、教材作成に時間がかかる、データの管理方法が不十分
- ・ ペアワーク：操作の説明が難しい、ヘッドフォンでの会話は不自然、能力差のあるペアでは学習が困難、一斉授業のため学生が興味を示さない、近くの人なら肉声でよいカセットテープ複写機：聞きながら録音する、ノーマルスピードで十分
- ・ Edit機能：操作が困難、ポースの位置がずれる、準備室でできる

上記の回答を見てわかるように、アナライザー機能とペアワーク機能については相克する結果が出ている。すなわち、一方では便利であると非常に高く評価されながら、一方では操作が複雑、教材作成に時間がかかるなどの理由から無くても良いと評価されている。この結果は、ユーザーが L L に求める機能に大きな差があることを明確に示している。L L に高機能性を求めるか、簡易操作性を求めるか、今後の L L のあり方に対して重要な意味を持っていると思われる。また同時に、高機能の L L を導入する場合には、教員に教材作成の時間と操作サポートが十分に与えられる必要性があることを示している。

IV-3. 改善すべき上位 3 機能 (回答 37 校)：重複回答

機能	大学教員(15校)	大学職員(10校)	中高(12校)	計(37校)
カセットデッキ	7(18.9%)	2(5.4%)	3(8.1%)	12(32.4%)
アナライザー	4(10.8)	3(8.1)	1(2.7)	8(21.6)
カセットテープ複写機	1(2.7)	2(5.4)	1(2.7)	4(10.8)
ヘッドセット	-	1(2.7)	2(5.4)	3(8.1)
ビデオ	3(8.1)	-	-	3(8.1)
ペアワーク	3(8.1)	-	-	3(8.1)
Edit機能	2(5.4)	-	-	2(5.4)
教材提示装置	2(5.4)	-	-	2(5.4)
録音／強制録音	-	-	2(5.4)	2(5.4)
音声出力方式	-	-	2(5.4)	2(5.4)
個別テレビ	1(2.7)	-	1(2.7)	2(5.4)
ボタン耐久性	-	1(2.7)	1(2.7)	2(5.4)
その他： 大学教員：スピーカー、ヘッドセット、OHP、コールボタン、 学生名入力、LDプレーヤー、 大学職員：パソコン、ブラウン管方式、タッチスクリーン、ボ リューム調整、列別教材送出機能、リモートコント				

ロール、プリンター、クローズドキャプション、インターコム、コンソール冷却ファン騒音、バージョン・アップ

中高教員： リピート、VTR ランダムアクセス、音声分析、ビデオ複写機ブースディスプレイ、シンプルにする

改善の必要な機能については、全体では、カセットデッキ（32.4%）、アナライザー（21.6%）、カセットテープ複写機（10.8%）が上位3機能であった。この項目については、上位3機種にユーザー間の差は見られないが、下位を見るとユーザーの立場の違いによって、日頃の使い方に違いのあることがわかる。すなわち、大学教員がビデオ、ペアワーク、Edit機能等に改善の必要を見いだしていることは、教師にとっての使用勝手に関心があることを示しているのに対し、中高教員はヘッドセット、録音／強制録音、音声出力方式など、生徒に直接的に影響する部分に関心を示している。

改善の必要な理由として次のようなことがあげられた。

- ・ カセットデッキ： カウンターメモリーが不正確、一時停止できない、オートリバースがない、マスターコンソールに3台以上必要、ブースデッキに選択メニュー機能をもたせる、テープ音量の調節巾を広げる、メモリー機能をつける、クロム、ハイポジションテープ対応にする
- ・ アナライザー： 操作の単純化、所用時間の短縮化（印字に時間がかかる）、プリンタと接続、細かい評価分析を可能にする
- ・ カセットテープ複写機： 音質の劣化を防ぐ、時間の短縮化

さらに、特徴のある意見として次のようなものがあった。

- a) モニター：モニターした学生名がわかるように何かのマークがでるとよい、生徒モニター、インカム等の動作に入るたびに、PGMモニターがOFFになるので、常にON状態にするべきである
- b) 画面切り替え：一つの作業に必要な画面が複数あり、非能率的である
- c) プリンター：レーザープリンターにできないか
- d) ペアワーク：毎回ペアの組み合わせを変えるのに時間がかかるので、自動的にランダムにペアが組み替えられると便利である対話者の顔、表情がモニターにでるとよい
- e) VTRのランダムアクセスが容易にできること
- f) 再生速度調節機能をつける
- g) 授業中好きなところに1,000ms程度のポーズを簡単に入れることができる機能を加える
- h) コールボタン：突然ブザーが鳴り驚く、対応方法も複雑である

IV - 4. 追加すべき上位3機能（回答29校）：重複回答

機能	大学教員(11校)	大学職員(8校)	中高(10校)	計(29校)
CALL/マルチメディア	2(6.9%)	2(6.9%)	1(3.4%)	5(17.2%)
音声分析	2(6.9)	-	2(6.9)	4(13.8)
CDプレーヤー	3(10.3)	-	-	3(10.3)
LDプレーヤー	2(6.9)	-	-	2(6.9)
アナライザー	2(6.9)	-	-	2(6.9)
成績管理機能	2(6.9)	-	-	2(6.9)
個別テレビ	-	1(3.4)	1(3.4)	2(6.9)
大スクリーン	1(3.4)	-	1(3.4)	2(6.9)
カセットデッキ	1(3.4)	1(3.4)	-	2(6.9)
シンプルにする	1(3.4)	1(3.4)	-	2(6.9)
その他： 大学教員：ペアワーク、ビデオカメラ、Edit、カセット複写機 大学職員：ICメモリー、パソコン、ヘルプ機能、自動読み取り入力装置 中高教員：ビデオ複写機、スライドプロジェクター、時計、VTRランダムアクセス機能、バーコード化、プリンター、ビデオ編集機				

今後LLに追加するべきだと思われる機能については、全体では、CALL (Computer-assisted Language Learning)あるいはマルチメディアと回答したものが17.2%であり、音声分析(13.8%)、CDプレーヤー(10.3%)が上位3機能であった。

しかし、回答は全体として大変ばらついており、個々のユーザーによってニーズや希望に大きな違いがあることを示している。

注目すべき意見として次のようなものがあった。

- 中高と大学は使い方が違うので、数種の機種を出して欲しい
- どのような機能が付け加われば便利かという以前に、基本的な操作（カウンタ、単純な教材の流し出し）がいかに簡単に正確にできるかということが最も重要であり、その上にいろいろなオプション機能がつけばよい
- 次の操作を行う場合に、現在の画面をクリヤーして（消して）次に移行するのではなく、現在の画面にウィンドウを開き次の操作ができるようにしてほしい
- アナライザーのように全体で一括して学生の成果を処理するのではなく、個々のブースの成果を個別に集計する機能がほしい
- LLとコンピュータを一緒にすると種々の問題がある。例えば、コンソールの負担が重くなりすぎる、学生にマルチメディアを体験させたいなら、学生用のモニターはタッチスクリーンにしないと机の上に機械がのりすぎる、アナログからデジタルへの移行をもっと推進しないといけない等の問題がある

LL活用の現状と今後の見通し

- f) 一人1台のスピーチトレーナー／音声波形提示機能をもたせる
- g) ペアワーク中の状態を強制録音でき、相互の会話状態を確認できる機能が必要
- h) 各個人ブースで画面の on/off が可能になること

V. コンピュータの導入について

V - 1. 現在LLにコンピュータを導入しているか（回答 58 校）：

	大学(36校)	中高(18校)	不明(4校)	計(58校)
YES	14(24.1%)	8(13.8%)	-	22(37.9%)
NO	22(37.9)	10(17.4)	4(6.9%)	36(62.1)

V - 2. 導入しているコンピュータの機種（回答 20 校）：重複回答

機種	大学(14校)	中高(6校)	計(20校)
NEC 9800シリーズ	7(35.0%)	1(5.0%)	8(40.0%)
NEC 98 Note	1(5.0)	1(5.0)	2(10.0)
NEC / Macintosh	2(10.0)	-	2(10.0)
エプソン/Macintosh	1(5.0)	-	1(5.0)
NEC/Fujitsu/Macintosh	1(5.0)	-	1(5.0)
MAC	1(5.0)	-	1(5.0)
Fujitsu	1(5.0)	-	1(5.0)
パナコム	-	2(10.0)	2(10.0)
パナコム/IBM	-	1(5.0)	1(5.0)
IBM/Macintosh/NEC	-	1(5.0)	1(5.0)
不明	-	1(5.0)	1(5.0)

V - 3. コンピュータ利用の目的（回答 20 校）：重複回答

目的	大学(14校)	中高(6校)	計(20校)
出席管理	6(30.0%)	2(10.0%)	8(40.0%)
成績管理	5(25.0)	1(5.0)	6(30.0)
音声分析	2(10.0)	-	2(10.0)
教材管理	2(10.0)	-	2(10.0)
自作教材提示	2(10.0)	-	2(10.0)
クローズドキャプション読み取り	1(5.0)	-	1(5.0)
文書作成	1(5.0)	-	1(5.0)
アナライザー	1(5.0)	-	1(5.0)
CAI/CALL	3(15.0)	3(15.0)	
本体作動のみ	-	2(10.0)	2(10.0)

ＬＬにコンピュータを導入しているのは、全体では、37.9%であった。大学レベルでは38.9%がＬＬにコンピュータを導入しているのに対し、中高レベルでは44.4%であった。

導入機種については、日本での高いシェア率を反映して NEC が48.6%占めているが、他機種も相対的に導入されており、ワークステーションを導入しているところが17.4%あった。大学、中高間に差は見られない。一つの学校で複数の機種を導入しているところが13.5%あった。今後の導入については、従来の形にとらわれず、コンピュータの機能とコンピュータを活用して何を教えたいかという教員側の目的によって、新しい導入が行われてゆくのではないと思われる。

その利用は、出席管理に使われているものが最も多く、40%であった。それに成績管理をくわえると、回答者の70%がCMI (Computer Management Instruction)として使用していることがわかる。指導にコンピュータを使用していると思われるのは、大学では、自作教材の提示、クローズドキャプションの読み取りと答えた3件(15.0%)であり、中高では、CALL/CMIと答えた3件(15.0%)であった。

V - 4. CALL / コンピュータ教室の有無(回答 55 校) :

CALL 教室	大学(34校)	中高(17校)	不明(4校)	全体(55校)
YES	24(43.6%)	11(20.0%)	3(5.5%)	38(69.1%)
NO	8(14.5)	4(7.3)	1(1.8)	13(23.6)
計画中	2(3.6)	2(3.6)	-	4(7.3)

V - 5. CALL / コンピュータ教室の仕様(回答 37 校) :

教室数/機種	大学(23校)	中高(12校)	不明(2校)	全体(37校)
1 教室設置	8(21.6%)	12(32.4%)	2(5.4%)	22(59.5%)
2 教室以上設置	15(40.5)	-	-	15(40.5)
NEC	10(27.0%)	6(16.2%)	2(5.4%)	18(48.6%)
Macintosh	6(16.2)	-	-	6(16.2)
Fujitsu	5(13.5)	1(2.7)	-	6(16.2)
Sun	4(10.8)	-	-	4(10.8)
Panacom	2(5.4)	2(5.4)	-	4(10.8)
IBM	1(2.7)	1(2.7)	-	2(5.4)
Hitachi	1(2.7)	1(2.7)	-	2(5.4)
不明	1(2.7)	1(2.7)	-	2(5.4)

CALL / コンピュータ教室は、全体の69.1%に設置されており、計画中を含めると72.7%の学校にコンピュータ教室があることになる。大学レベル、中高レベルでの差はあまりない。

LL活用の現状と今後の見通し

仕様については、1教室設置している学校は全体の 59.5% であるが、大学レベルでは 65.2% が2教室以上設置している。導入されている機種はNECが 48.6% をしめ、以下はさまざまである。

V - 6. CALL / コンピュータ教室とLLとの関係 (回答 37 校) :

	大学(23校) 中高(12校) 不明(2校) 全体(37校)			
別教室別組織	22(59.5%)	9(24.3%)	1(2.7%)	32(86.5%)
別教室だが管理体系は同じ	1(2.7)	1(2.7)	1(2.7)	3(8.1)
LLに組み込まれている	-	2(5.4)	-	2(5.4)

CALL / コンピュータ教室がLLに組み込まれているという回答は全体の 5.4% しかなく、83.8% が別教室・別管理体系をとっている。この背景には、いわゆる情報処理教育と外国語教育の目的の違いが考えられ、この双方を1教室で行うことには無理が生じるからであろう。

しかし、コンピュータ・ルームでは情報処理だけ、LLでは外国語だけに限定するのも現実的でないと思われる。実際に情報処理教育用の部屋で英語の授業を行っている例も多い。またLLの利用目的の調査結果にもあるように、英語等外国語以外の授業でLLが使われている例も多くある。コンピュータ教室とLLが互いにその特徴を活かして、相互補完的に使用されるのが望ましいのではないだろうか。

V - 7. LLにコンピュータを導入しない理由 (回答 38 校) : 重複回答

理由	大学(24校)	中高(11校)	不明(3校)	全体(38校)
予算	11(28.9%)	4(10.5%)	-	15(39.5%)
研究不十分	4(10.5)	1(2.6)	-	5(13.2)
管理/運用の問題	3(7.9)	2(5.3)	-	5(13.2)
操作が複雑	4(10.5)	-	-	4(10.5)
他にコンピュータ教室がある	2(5.3)	-	2(5.3)	4(10.5)
必要性がない	1(2.6)	3(7.9)	-	4(10.5)
教員/事務職員不足	3(7.9)	-	-	3(7.9)
LLに強い教員とコンピュータに強い教員が一致しない	2(5.3)	1(2.6)	-	3(7.9)
導入計画中	2(5.3)	-	-	2(5.3)
部屋が取れない	2(5.3)	-	-	2(5.3)
目的が違う	1(2.6)	-	-	1(2.6)
効果の見通しが無い	1(2.6)	-	-	1(2.6)
受験に適さない	-	2(2.6)	-	2(2.6)
システムとして未完成	-	-	1(2.6)	1(2.6)

ＬＬにコンピュータを導入しない理由としては、予算が十分でないというものが全体の 39.5% であった。その他には、研究不十分、管理運営の問題が各 13.2%、機械操作が複雑、他にコンピュータ教室がある、必要性がないが各 10.5% であった。コンピュータは受験に適さないので導入しないという意見が少数だが 5.3% あり、日本の中学・高校に独特の考え方であると言える。しかし、コミュニケーション重視の新指導要領が徹底され、入学試験に音声テストが加えられることが当然になると、中高における英語の授業形態は大幅に変わることが予想される。その時には、コンピュータを含むメディアの活用への要求が高まり、それに伴い新しい形のＬＬが導入されるようになるであろう。

VI. これからのＬＬについて：夢を語る

この項目は完全な自由記述式で回答を求めたので、多種多様な意見が出された。それを筆者の判断によって、関連性の高いものをまとめ、下位項目に分類して整理した。文末の（ ）の中の数字は重複する意見の数を示す。すなわち同じ意見が２つあれば、文末に（２）として表示した。すこしニュアンスが違うと判断したものは、よく似た意見であってもそれぞれ独立して提示した。

VI-1. 今後のＬＬはどうあるべきか（授業と関連して）： 回答数 47

VI-1-1. ハードウェア面

ハードウェアの面では、意見を次の４点にまとめることができる。

- | | |
|-------------------------|-------|
| [A] 操作の簡易性 | 27.7% |
| [B] マルチメディア、コンピュータ化の必要性 | 23.4% |
| [D] 機能の充実 | 19.1% |
| [C] 個別学習に対応する必要性 | 4.3% |

[A] 操作の簡易性 (27.7%)

- (1) 機械操作が簡単であること (7)
- (2) 基本機能のしっかりしたシンプルな機種が必要 (3)
- (3) メーカー間の違いをなくすこと
- (4) 機械に束縛されてＬＬを十二分に使いこなしていない
- (5) メーカー間の機能競争にはうんざりする

[B] マルチメディア、コンピュータ化の必要性 (23.4%)

- (1) マルチメディア機器を導入し、コンピュータ化する (4)
- (2) マルチメディアＬＬの設置
- (3) Individualized, multi-media study centerにする
- (4) ビデオ, CD-ROMを各ブースに設置する
- (5) C A I化するが、キーボード等の面倒なものは省く
- (6) 多種のメディア、資料に対応する機器を備えた多目的教室とする
- (7) situational communication学習のできるsimulation roomにする
- (8) VTR は LD に, audio tape は CD に, sequential access は random access にする

[C] 機能の充実 (19.1%)

- (1) 学生の活動状況が指導者に伝わるモニターにする
- (2) のテープレコーダ機能をレベルアップする
- (3) 学習者に教材の反復回数、各設問の正答、誤答記録を提示する
- (4) 音声情報を含めて学習者の英語力を評価してフィードバックする機能をつける
- (5) 学生用ブースにICメモリーをつける
- (6) 学生が使用しやすく、興味を持ちやすい機器を導入する
- (7) 簡易LL教室を語学で使用する全教室に設置する
- (8) 各ブースにTVモニターを設置し、音声と映像が送出できる設備を高校、中也整える
- (9) LLは機械的で冷たいイメージがある

[D] 個別学習に対応する必要性 (4.3%)

- (1) reading, writingなどの基礎能力の自主学習、個別学習のための新しいソフトウェアの開発の必要
- (2) 遅刻生、slow learners等に対応するため、学生用ブースに自習機能を持たせる

今後のLLについての意見で、ハードウェアに関したもののの中では、操作のより単純な、誰でもが使えるLLを求める声が全体の 27.7% で最も多かった。特にその要望の 84.6% が大学レベルから出されたことは、大学でのLL利用者の範囲が広いだけに機器の操作能力に差があり、全ての利用者に対応するのに苦慮している様子を現している。

しかし、一方では、マルチメディアやコンピュータ化を求める意見も23.4%と強い。現状では、コンピュータを導入すると、機器の数と操作の数は増えると予想され、LLの単純化、簡易化の要求にそわない。このことは、今後のLLの二極化を示していると思われる。すなわち、より単純で基本機能だけを搭載したLLと、複数のメディアを組み合わせた教材提示と個別学習ができる多機能なLLとに分かれるのではないかと予想される。

機能については、学習記録とフィードバック機能を充実させる要望が強い。このことは個別学習の要求に結びつく。今回のアンケート結果は、これからのLLはLL自習室を含め、それぞれの学生の興味と能力にあった学習ができるような環境を提供できるようにならねばならないことを示唆しており、アメリカの IALL が 1988 年に行ったLLの動向調査 (Lawrason, 1991) と一致するものである。

VI - 1 - 2. ソフトウェア面

ソフトウェア面の意見をまとめると次のようになる。

- | | |
|-----------------|-------|
| [A] LLの利用分野 | 14.9% |
| [B] LLの役割について研究 | 14.9% |

- | | |
|-----------------|-------|
| [C] LLにおける教材開発 | 10.6% |
| [D] LLにおける教授法研究 | 8.5% |

[A] LLの利用分野 (14.9%)	(1) Oral/Aural 能力向上の場としてLLを利用する (3) (2) Oral/Aural 能力のテストを行う (3) 英語に関するさまざまな科目でLLを活用する (4) 外国語だけでなく幅広い分野でLLを利用する (5) 会話、ディベートに利用する
[B] LLの役割について研究の必要性 (14.9%)	(1) 究極的には人間対人間のコミュニケーションの場が必要 (3) (2) LL/マルチメディアにおける教師の役割 (3) LL、英会話、英文購読のように役割を分業させる (4) 1つの教材における日本人教師、ネイティブスピーカーの教師、LL教室の位置づけ (5) LLだけが一人歩きすべきでない
[C] LLにおける教材開発 (10.6%)	(1) 衛星放送、ビデオ等多角的学習補強教材を導入する (2) (2) 教材開発の必要がある (3) 学生が自由に個々の能力にあった教材を選択できること (4) 個人の實力にあった別ソフトを各ブースで学習できること
[D] LLにおける教授法研究の必要性 (8.5%)	(1) LL授業方法論研究体制の充実 例：マルチメディア外国語教育研究所等の設立 (2) LL利用のコミュニケーション学習のあり方 (3) LLは一方的な受信型の学習になりやすい (4) ビデオレターを外国と交換して学習動機を高める

LLの利用分野については、Oral/Aural 能力向上の場として利用するという意見が3件あり、最も多かった。他には、Aural/Oral 能力テストの場として、英語（外国語）に関するさまざまな分野で、語学だけでなく他分野でLLを活用するべきであるという意見があった。これらは回答数としては各1件と少ないが、今後のLLのあり方を示唆する貴重な意見と言えよう。

LLの役割について、LLを利用したときのLL、教師、教材等の役割をどのように位置づけるかが大切であると指摘する意見が比較的多かった。特に外国語学習では機械にたよらないコミュニケーション、つまりネイティブスピーカーとのコミュニケーションの必要性を指摘する声は3件あった。これは教授法研究、教材開発の問題と関連しており、LL教授法研究体制を整える必要性を示していると言える。例えば「マルチメディア外国語教育研究所」（仮称）を設立することが大切であるという意見があった。

VI - 1 - 3. 管理運営面

[A] LL自主学习室の必要性 (8.5%)

- (1) LLを自主学习室としても解放する (2)
- (2) 授業専用のほかに学生用LL自习室が必要
- (3) Learning Laboratoryを目指すべき

管理運営の面では、LLの自习室を設置する、あるいは自习用に解放する必要性を指摘する意見が8.5%あった。これは回答数としては少ないが、ハード面での個別学習に対応するLLを求めることと関連し、今後のLLを考える上で重要であると思われる。

VI-2. 学習者のコミュニケーション能力向上のため、どういうメディアを導入し、どう使用すべきか？問題点は何か？： 回答数 36

VI - 2 - 1. ハードウェア面

ハードウェアの面の意見は次のようにまとめられる。

- | | |
|-------------------|-------|
| [A] 映像、音声、文字の同時提示 | 30.6% |
| [B] コンピュータの導入 | 25.0% |
| [C] 機能向上 | 5.6% |

[A] 映像、音声、文字の導入 (30.6%)

- (1) LD、Video、キャプションを導入する (4)
- (2) 各ブースに受像機を設置し、画面に現れる人と対話練習をし、両者の声を録音して、後でコメントや評価ができるようにする (2)
- (3) 音声多重放送／バイリンガル映画 (音声2カ国語／字幕翻訳付き) を使用して、主、副音声の切り替え、日本語訳のテロップを写したり消したりする (2)
- (4) 相手の表情を見ながら対話ができるように、簡単に使えて、良く見える映像を導入する
- (5) LD、CDの導入と複合機能を引き出せる設備を導入する
- (6) 立体映像とステレオ音響の導入による臨場感あふれる言語体験をさせ

[B] コンピュータの導入 (25.5%)

- (1) コンピュータを導入する (2)
- (2) コンピュータと学生が対話して問題解決やシュミレーションができるようにする (2)
- (3) マルチメディアコンピュータ学習システム
- (4) 中級程度ではデータベースで検索したものを作文する
- (5) LDとパソコンを結合する

- (6) 実際のコミュニケーションに限りなく近い体験（TVゲーム等）をさせる
- (7) パソコンのキーボード操作は廃止する
- [C] 機能向上（5.6%）
 - (1) 学生の音声をコンソールのテープに一括録音できるシステムにする
 - (2) ヘッドフォンを通して正確に音声を把握することに重点をおく再生速度調整ができるようにする

映像、音声、文字の同時提示について、画面に現れる人物との対話を想定している回答が3件あった。また、ビデオキャプション、ビデオディスク、音声多重放送とL Lの連結を求める意見が7件あった。これらは一種のマルチメディアを念頭においていると思われるが、どの程度までメディアを取り込みプログラム化することを考えているかはこの項目では不明である。

コンピュータの導入についても、どの程度の導入を考えているかは回答では明確には示されなかった。対話型やシュミレーション型の学習、データベース利用等具体的な利用方法について述べているものが3件あったが、文字だけか、映像と音声も取り込むことを考えているのかは指摘がなかった。マルチメディアの導入と明確に回答しているものが1件あったが、どういうマルチメディアかは不明である。

その他としては、学習者の音声をマスターコンソールに一括同時録音できるシステムや再生速度調節の機能を求める意見があった。これらはL Lの基本機能として導入されるのが望ましいと思われる。

VI - 2 - 2. ソフトウェア面

ソフトウェアの面の回答は次のようにまとめることができる。

- [A] Authenticな教材の導入 25.0%
- [B] 各種教材の充実 11.1%
- [C] 自主教材の開発 8.3%

[A] Authentic な教材の導入

- (1) 映像、音声、文字をいろいろな形で授業に取り入れ、学習の動機付けに役立てる（例：CNN）（4）
- (2) 映画を導入する（2）
- (3) 日本語字幕なしの映画を導入する
- (4) 外国のニュース、TV番組、映画等を取り入れる
- (5) 原稿のない、即興の英語（例、インタビュー）の聞き取り練習をする

[B] 各種教材の充実

- (1) ビデオ、映像を扱えるコンピュータ・ソフトを導入する

- (2) 家庭での学習に幅が出るものを導入する
- (3) 学生の意見を十分反映できるメディアを導入する
- (4) 日常生活や文化的知識を盛り込んだメディアを使用して、特別な状況だけでなく総合的コミュニケーション能力を育成する

[C] 自主教材の開発

- (1) 内容、量的に短大の授業にふさわしく使いやすいビデオ教材の開発
- (2) パソコン、言語、動画、ビデオ、音声をミックスした自主教材の開発
- (3) 市販の EFL 教材よりも生徒に身近な自主教材を作成したい

Authentic な教材の導入については、映画、ニュース、TV 番組を取り入れたいとするものがほとんどであった。中には日本語字幕なしの映画や原稿のない即興の英語、たとえばインタビューや立体映像（バーチャル・リアリティ）などを授業に活用したいとするものがあつた。

その他の教材について、教材そのものよりも、映像教材を処理するコンピュータ・ソフトウェアの導入の必要を述べているものがあつた。使い易いオーサリング・システムの導入は、自主教材の開発にも重要であり、今後のLLの重要な課題の一つであると思われる。

自主教材の開発については、学習者に身近な話題で、量的にも内容的にもふさわしい教材を提供しようとする姿勢が示されていた。

VI - 2 -3. 問題点

問題点として挙げられた意見をまとめると次のようになる。

[A] 予算、管理運営	27.8%
[B] 指導方法	19.4%
[C] 教員の負担	16.7%
[D] 著作権問題	5.6%
[E] その他	13.9%

[A] 予算、管理運営 (27.8%)

- (1) 経費がかかる (7)
- (2) 助手等が必要である (2)
- (3) ビデオ教材の値段が高い

[B] 指導方法 (19.4%)

- (1) Authentic Englishに対して学生の理解のための援助をどうするか問題である (2)
- (2) 指導方法が問題である (退屈させず、恥ずかしがらせないこと)

	(3) 入試対策の文法とコミュニケーション英語にギャップがある
	(4) 各学年のコミュニケーション能力設定の具体的な基準作りが必要である
	(5) TV ゲーム／シミュレーション等は集団授業に向かない
	(6) LD を導入すると独自性をいかに盛り込むかが問題である
[C]	教員の負担 (16.7%)
	(1) マルチメディア導入には教員の負担が大きい
	(2) コンピュータを導入すると指導できる教員が少ない
	(3) 学内で人的摩擦の可能性がある
	(4) LL無用論が多く、英語科教員間の理解が得にくい
	(5) 自主教材作成には時間の制約がある
	(6) 各種のメディアを導入すると使いこなすのが難しい
[D]	著作権問題 (5.6%)
	(1) 映画、音楽、テープ等の著作権問題をどう解決するか (2)
[E]	その他 (13.9%)
	(1) 究極のメディアは生のネイティブスピーカーである (2)
	(2) 機械としていかにネイティブスピーカーに近づけるか
	(3) コミュニケーション能力の向上のために機械に頼りすぎるのは疑問である
	(4) LL教室とCALL教室は別にして1コマを半分ずつ使用する

問題点としては、LLは経費がかかり、予算がなかなか取れないとする意見が 27.8% あった。その中で、助手の必要性を指摘した意見が 5.6% あった。

LLが現在十分に活用されていないとするならば、その大きな理由の一つが教員の負担が大きいということである。回答を見ると、今後コンピュータ、マルチメディアの導入で、教員の負担が更に大きくなるのではないかとする危惧が強く現れている。このことは、コンピュータ化したLLを扱える教員とそうでない教員との差別を生む可能性があり、教員間の摩擦、LLへの理解を得難いという環境をつくり出す要因となる恐れがある。使いやすいLLと教員研修が課題である。

LLでの指導方法について、authentic な教材を導入した場合の学生の理解への援助をどうするかを指摘する意見が 5.6% あった。今後のLLのあり方の項目で、authentic な教材の導入を望む意見が強かったが、導入後の指導方法の確立も、これからのLLの重要課題である。また、authentic な教材を取り入れると入試指導と一致しない問題や、コミュニケーション能力の基準をどこに設定するかを指摘する意見があった。

著作権問題に言及したものが、少数ではあるが 5.6% あった。マルチメディアになると、TV、映画、歌などを教材に取り込むことが増え、著作権問題に抵触することが現実になる。今後教育的利用における著作権について LLA でも検討する必要がある。

その他としては、LLとネイティブスピーカーの役割の問題を提起し、メディアへの

疑問をなげかけたものが 11.1% あった。この問題は繰り返し現れており、LLの意義を再検討する必要性を示している。

VI-3. 現在のLLはマルチメディアの出現によりどう発展すると予測するか？：

回答数 37

VI-3-1. ハードウェア面

ハードウェアの面では、次のような予測がされた。

- | | |
|-------------------------|-------|
| [A] 成績等あらゆる情報処理が可能になる | 13.5% |
| [B] 学習形態が変化し、個別学習が可能になる | 13.5% |
| [C] デジタル化し、コンピュータ・ラボになる | 8.1% |
| [D] 基本的に変化しない | 5.4% |
| [E] その他 | 8.1% |

[A] 成績、出席等の管理 (13.5%)

- (1) 集団授業用にはアナライザーの結果をコンピュータで成績管理する
- (2) コンピュータは教師のpresentationあるいは成績管理にのみ使うLLと一体化させるとかえって非効率である
- (3) The multi-media learning systems will/should become dispersed and networked throughout the university.
- (4) あらゆる情報を記録できる、信頼性の高いブース用機器を中心に構成される
- (5) 使用が簡単になり、短時間でデータ処理ができれば意義がある

[B] 学習形態の変化と個別学習化 (13.5%)

- (1) 個人の能力にあった取り組みができる
- (2) 学生一人一人が自分で学習操作をするようになる
- (3) 個人の進度に即したメディアを個々のブースで一斉に学習できるように発展して欲しい
- (4) 視覚的な分野が発展し、CAI教室的になると思う
- (5) コンピュータの処理速度の速さ、的確さ、LD&CDの映像、音声の現実感との有機的統合ができればよい

[C] デジタル化 (8.1%)

- (1) コンピュータ内蔵になりコンピュータ・ラボラトリーに吸収されてしまい、カセットテープの代わりにデジタルメモリーに音声をおとせるようになる
- (2) 現在のブーステレコがデジタル化された媒体に代わり、視覚資料、動画資料が頻繁に利用され、現在のマスター・コンソールは消滅し、パソコンを組み込んだコンソールに変わる

(3) パソコン通信ができるようになる	
[D] 変化しない (5.4%)	
(1) 基本的に大きな変化はない	
(2) 根本的な機能はほとんど変化しない	
[E] その他 (8.1%)	
(1) コンピュータを用いた学習とＬＬ学習は切り離した形で発展すべき	
(2) 極限の機能を持ったＬＬが出現する	
(3) 総合的な英語力の強化につながる機器が使用されてくる	

マルチメディアの出現によってＬＬはどのように発展するかについて、ハードウェア面では、成績や出席等あらゆる情報の記録と処理ができ、またネットワークによって、どこからでもその情報にアクセスできるようになると予測する意見が 13.5% あった。マルチメディアによって学習形態が変化することは十分予測できることであるが、具体的には個別学習の方向に進み、音声、映像の有機的結合が行われると予測している。一斉個別学習、すなわち、「個人の進度に即したメディアを個々のブースで一斉に学習する」形態を望む意見があったが、それは日本の教育環境では一つの理想形態であるかも知れない。テープレコーダのかわりに、デジタル化した媒体に音声を録音するようになり、現在のＬＬコンソールはなくなり、コンピュータが中心になると予測する意見が少数ではあるが 5.4% あった。一方、マルチメディアが現れても、ＬＬは基本的に変わらないとする意見も 5.4% あった。

その他の意見の中には、ＬＬとコンピュータ利用学習との共存を危ぶむものがあり、ＬＬはコンピュータから切り離すべきとする意見が 5.4% 見られた。また、今後に対する究極の意見として、「極限の機能を持ったＬＬが出現する」というものがあった。

VI - 3 - 2. ソフトウェア面

ソフトウェア面での予測をまとめると次のようになる。

[A] 自学自習用のソフトが開発される	10.8%
[B] 映画、映像の利用が身近になる	8.1%
[C] その他	8.1%

[A] 個別学習に対応	
(1) アドベンチャーゲーム形態のソフトが登場し、学生一人一人に違う対応ができるプログラム化された問題の入ったフロッピーを用い、ビデオの再生をしながら、各自がアナライザー（または音声）で答え、機械は答えを判断して、その学生にふさわしい次の問題を示す	
(2) 個人用には各種の自学自習用のソフトが開発され、機器の進歩とともに教材も進歩する	

- (3) 自学自習用のソフトが発展するであろう
- (4) コンピュータの導入では、文法ドリル等をゲーム感覚学習させたい

[B] 映画、映像の利用

- (1) 映像を自由に扱え、実際のコミュニケーションの場に近い環境を作り出せるので、コミュニケーション能力の飛躍が期待できる
- (2) 映像がもっと身近になる
- (3) 映画を利用したロールプレイ的なソフトが開発される

[C] その他

- (1) ハード面の先行に対して、ソフト面における、特に外国語教育におけるLLの効果の検証が今後の課題である
- (2) コンピュータは英語授業のプロセスの一部である
- (3) 反復の頻度が減少する

ソフトウェアについては、個別学習に対応するソフトが開発されるとする意見が10.8%あった。個別学習の内容の概略を述べたものが1件あったが、コンピュータ、即ちゲームの図式ができあがっているようである。ゲームの要素以外にもコンピュータの特性を生かしたソフトウェアの出現が期待される。

映像については、映像が身近になり、自由に扱えるようになると予測し、その結果、映画を利用したロールプレイのソフトが開発され、学習者のコミュニケーション能力が高まると期待している。しかし、著作権問題があり、どのような映像も自由に扱えると期待するのは危険である。

その他では、ソフト面における効果の検証の必要性を指摘する意見と、マルチメディアが導入されることで反復の頻度が減少すると危惧する意見もあった。

VI - 3 - 3. 管理運営面

管理運営の面でのマルチメディアの影響については次のようにまとめられる。

[A] リテラシー向上の必要性	10.8%
[B] 教員負担の軽減	5.4%
[C] Learning Laboratoryになる	2.7%
[D] その他	10.8%

[A] 教員のリテラシー (10.8%)

- (1) 管理運営が複雑化し、管理者と利用者のリテラシーが安定的に向上しないかぎり発展は望めない
- (2) マルチメディア/コンピュータに対応できるビジョンを現場の学校の教師が持つことができるか大いに疑問である
- (3) 使いこなせば、良い方向にすすむとおもう

(4) いくらよい機械ができて人間にとって使いこなせないものはダメである

[B] 教員の負担の軽減化 (5.4%)

(1) 教師の片寄った問題を平均化する

(2) 学生個人の作業が増え、担当教員は装置の操作以外に説明する必要がなくなる

[C] Learning Laboratory (2.7%)

(1) Learning Laboratory としての性格がつよくなる

[D] その他 (10.8%)

(1) 何でもかでも C A I という風潮には疑問を感じる

(2) コンピュータが授業の全課程を占めるとは思わない

(3) L L とマルチメディアを関連づけるべきかどうかまだわからない

(4) 機器は急速に進歩するが、人間が主体であることを忘れてはならない

管理運営面では、まず、利用者も管理者もコンピュータ・リテラシーが向上しない限り、L L の発展は望めず、使いこなしが難しいのではないかと予測しているものが 10.8% あった。しかし一方では、使いこなせばよい方向にすすむという希望的予測もある。

マルチメディアになることで、学生の作業が増え、教員は操作説明以外に説明する必要がなくなるという極端な意見もある。しかし、教員の役割を考えると、そのようなことは起こらないと思われるが、回答が示すように、教員間の格差が少なくなることは起こり得ると予測できる。

L L はマルチメディア導入によって Learning Laboratory としての性格が強くなると予測している意見は 1 件しかなかったが、今後の L L を考えると、その可能性は高いと思われる。すなわち、外国語中心の Language Laboratory から、いろいろな教科／分野で活用でき、学生がそこに行けば必要な情報は、映像、音声、文字にかかわらず、手に入れることができる場としての Learning Laboratory になると思われる。

その他としては、この項目においても、コンピュータやハードウェアが先行し過ぎる危険性を指摘したものが 8.1% あった。また、L L とマルチメディアを関連づけるべきかどうか不明であるとする意見もあった。

VI - 4. 理想の L L 像 : 回答数 40

VI - 4 - 1. ハードウェア面

理想の L L について、ハードウェアに関する意見は次のようにまとめられる。

[A] シンプルな L L	17.5%
[B] 個別学習に対応する L L	15.0%
[C] C A L L / マルチメディア	15.0%

[A] シンプルなLL (17.5%)

- (1) 初めて見た先生でも、機械に弱い先生でもすぐに使い方がわかり、それでいて基本をしっかりとおさえたLL：コンソールはしっかりとしたカセットデッキとミニディスクを搭載すること、学生用デッキはコンソールなみのしっかりしたもので、聞き取りの音量調節ができること、タッチシートはダメである
- (2) シンプルで、耐久性のあるもの
- (3) 学生にいたずらされても大丈夫なハードウェア
- (4) 省力化、簡単化して多くの教師に使用され、かつ実用英語に効率的なLL
- (5) 今はいろんな機能が多すぎる、もっと平易で使いやすいのがあっても良い
- (6) 英語科の教師全員がLL利用ができ、操作が簡単であること
- (7) 授業でLLの機械にふりまわされないこと

[B] 個別学習に対応するLL (15.0%)

- 1) コンピュータ制御の完全な個別学習形式のLL：フェジイ理論等の導入により、学習者の関心、能力、etc. を分析し、自動的に教材等を提示してくれるシステム（知的CAIとも呼ぶべきもの）のLL、例えば、学習者の能力、成績等から自動的に繰り返し回数、ポーズ時間等を判断するシステム
- (2) 各個人が別々の作業をするのに対応できる設備、できれば個人使用に別のLLを設置する
- (3) ワークショップ形式の授業において、学生が自由な時間に必要な教材を選んで学習できること
- (4) ヘッドホーンを非常に安価にし、自分専用のものを使わせたい
- (5) ヘッドセットは圧迫感の少ない耳かけ式のものに変えること
- (6) ハンディキャップ者用の機器をそろえる

[C] CALL / マルチメディア (15.0%)

- (1) マルチメディア教室とLL教室の併用ができること
- (2) 衛星を通じて外国の人と対話ができるシステムを教室に導入し、学生1人に対し、相手も1人いるようにし、学生用モニターはそれに対応すること
- (3) 集中した施設（マルチメディアセンター等）を構想したい
- (4) 自動的に各学生の学習記録ができるシステムで、LANを設置し、学内のどこからでもサーバーで学生の情報を引き出せるシステム
- (5) CAIを導入し、英作文や音声分析装置を使つての発音練習をする

(6) 外国語教育(学習)のcockpit、simulation roomとなる:
英語授業 \longleftrightarrow LL \longleftrightarrow CAI \longleftrightarrow ネイティブスピーカー
ズの連係

理想のLL像について、ハードウェアの面では、シンプルで、使いやすく、丈夫なLLを望む声が17.5%あった。この要求は複雑なことではできなくてもよいから、誰でもが使えるLLを目指したものである。一方、個別学習やマルチメディアの可能なLLを望む声もそれぞれ15%あった。これは機器に可能な限りの高度な仕事をさせ、学習の動機付けと教育効果を高めようとするものである。しかし、高度なLLを要求する一方で、前項で見たように、利用者のリテラシーについて疑問をもっており、使いこなせるかを危ぶむという矛盾もかかえている。この回答結果は、ユーザーによって理想とするLL像はまちまちであり、1形態のLLで対応できるものでないことを示している。

VI - 4 - 2. ソフトウェア面

理想のLLにおけるソフトウェア面の意見は次のようにまとめられる。

- | | |
|---------------------|-------|
| [A] ソフトウェアの充実 | 25.0% |
| [B] Authenticな教材の導入 | 7.5% |

- [A] ソフトウェアの充実 (25.0%)
- (1) ビデオのソフトが増えること
 - (2) ハンディキャップ者用(視覚主導/聴覚主導)教材とゆとりのあるテープ教材をそろえる
 - (3) テープライブラリーの充実
 - (4) コンピュータソフトの互換性が高くなりソフトが充実すること
 - (5) ソフトの充実が最も大切
 - (6) ソフトの開発がすすむこと
 - (7) ソフトの種類が増え、コストが値下がりすること
 - (8) ソフトの多種導入
 - (9) 個別学習対応のソフトの改善
 - (10) 誰にでも易しいソフトウェア
- [B] Authenticな教材を導入できるLL (7.5%)
- (1) キャプションつきTVニュース最新版を毎週購入し、時事英語とリスニングを結び付ける
 - (2) 自然な場面で用いられる言語教材、飽きのこないもの、練習量が十分確保でき、各ユニットが短いもの、音声や映像はもちろん、学習者の動きを必要とするもの
 - (3) 世界中のテレビとラジオが録画録音のみならず、リアルタイムで視聴できること

ソフトウェアの面では、まずソフトの充実が理想のLLとして望まれているが、その内容は、多種類のソフト、低価格、個別学習対応、機器の互換性、操作性に優れていることである。注目すべき意見として、ハンディキャップ者用教材の充実をあげるものがあった。

Authentic な教材では、キャプションつき TV ニュースの購入や外国の TV / ラジオのリアルタイム視聴があげられた。理想的な教材として「自然な場面で用いられる言語教材、飽きのこないもの、練習量が十分確保でき、各ユニットが短いもの、音声や映像はもちろん、学習者の動きを必要とするもの」という意見があった。「学習者の動きを必要とする」ということは、受信型学習から発信型学習を促進する教材を指摘しており、これからのソフトウェアの方向を示していると思われる。

VI - 4 - 3. 管理運営面

理想のLL像における管理運営面の意見は次のようにまとめられる。

[A] 教員・職員の体制の整備	35.0%
[B] LLのあり方	17.5%
[C] LL自習室の設置	7.5%
[D] ライブラリーとしてのLL	7.5%
[E] 予算の充実	5.0%

[A] 教員／職員の体制 (35.0%)

- (1) LL教室、教材作成室（準備室）、学生自習室、資料室が同じラインに並び、確立した教官（運営委員会）と事務官（LLセンター）の組織関係を作り、相互協力で研究開発を進めていくこと
- (2) LL教室を使う、また外国語担当の全教員が意見を出し合って、よりよいものになるような協力体制がいる
- (3) 教師に教材開発、準備、及び新しいハード、ソフトの研究時間があること
- (4) 英語担当教師ができるだけ交代でLL講座を担当する
- (5) LL授業をテープをかけて休める楽な授業だと言う誤解をなくす
- (6) 公立中学校の現状では人的な問題が多い：LLを十分に利用できる教師側の時間確保が必要である
- (7) 専属の管理者（事務）はもちろん、機器の修理ができる人、教材作りのできる人（ネイティブを含む）そしてそれを教える人がチームを組めば怖いものなし
- (8) 専任の、しかも専門的な知識と経験を有する事務官と技官が複数いること
- (9) ソフト、ハードの管理と教材選択の責任者がいること
- (10) LL教室をいつもオープンにしておき、学生が好きなときに

自習に利用できること、そのための専属の助手がいること

- (11) 専任の助手が必ず必要
- (12) 多種多様のハード、ソフトを扱う関係上、人事移動のない専門職員育成が必要である
- (13) スタッフが揃っていて先生方の編集制作に寄与できること
- (14) ハード面を援助する人材が1部屋に1人配置される体制をとれること

[B] LLのあり方 (17.5%)

- (1) LLのシステムは現状はお金と手間のかかる特別な存在であるが、機能面から言えば特別なものではなく、従って、将来、技術が発展し、コンピュータがもっと使いやすくなれば、音声、映像も統合され、教材もコンパクトになり、全ての教室に基本的なシステムとして導入されるのではないか
- (2) 学生が何を望んでいるかを第一に考え、教員の意見も十分考慮し、一人でも多くLLを使用してもらうこと
- (3) 今までのような授業形態でなく、各学生の自習学習を促す場となるとよい：学習者が言語を習得することは面白いと思うように、英語教育全体の中での位置づけを明確にすること
- (4) 学生が「LL教室の授業は好きだ、それによって英語力が伸びた」と言えるような内容のものになること
- (5) もっと楽しく行けるようなLL教室
- (6) マルチメディアによる集合教育現状より、少人数教育の実践のためのLLであるべきである
- (7) LLでできることとネイティブスピーカーのできることを明確にしていくこと

[C] LL自習室の設置 (7.5%)

- (1) 授業用LLと自習用LLはそれぞれ独立した形で運営されるべきであり、自習用LLには、学生が各自でソフトを編集できる機能を追加すること
- (2) 自習室があり、夜8時頃まで学生と教官に解放されていること
- (3) 学生にLLの自学自習の時間が十分あること

[D] ライブラリーとしてのLL (7.5%)

- (1) LLは万博公園国立民族博物館のビデオブースのような「サービスセンター」的役割を果たすようになる
- (2) LL教室が英語に関するコア教室となり、雰囲気においても設備においても学習の興味をそそるものであること、学生が自分で学習テンポを決めることのできる英語のリファレンス教室、他教科、例えば音楽科等でも使用可能なマルチ教室であって欲しい
- (3) 家庭学習につながる工夫ができないか

[E] 予算の充実 (5.0%)

- (1) ハードとソフトの予算が豊富であること
- (2) LLの配置される環境の整備

管理運営の面では、何よりも教員および職員の勤務体制を整備し、教職員の協力体制と教材開発の時間の確保を望む声が 35.0% と圧倒的であった。本アンケートの「VI. これからのLLを語る」のセクションの中で、この問題に最も多数の意見が寄せられたことは、教員にとっても職員にとっても、その協力体制が最も切実な問題であることを示していると思われる。Human resources (人材) の活用が、Learning Lab, Resource Lab を含めて、これからのLLの鍵であろう。

LLのあり方については、いろいろな意見があるが、総合すると、LLは学習の基本システムとして各教室に設置され、学生の自主学習を促し、多くの人に楽しんで使用される場となることを望んでいる。同時にここでも、LLの役割とネイティブスピーカーの役割を明確にする必要性を指摘している。

LL自習室の設置とライブラリーの充実を望む意見はそれぞれ7.5%あった。今後LLが個別学習に対応していくには当然の方向であり、機器の新規開発を待つまでもなく、早急に充実されることが望まれる。

LLを運営するためには、予算がなくてはならないが、予算を問題としてあげた意見は5%と少なかったのは意外であった。これは予算の厳しさを知りすぎているため、言っても無駄というあきらめがあるのかも知れない。しかし本当に良い教育を目指すには、今後はメディアの活用、特にコンピュータの活用は避けられず、ユーザーの側に明確な指導計画案と機器導入案にもとづく予算計画が望まれる。

まとめ

アンケート結果を各項目に従って、詳細に検討してきたが、ハード面で言えることは、ユーザーによってLLに望むものが非常に違っており、それぞれの希望に対応することは1機種のLLでは不可能であるということである。すなわち、今回のアンケートの回答者の約半数はシンプルで使い易いLLを希望しており、残りの半数はコンピュータを導入した高度なLLを望んでいる。またLLの利用範囲は、従来の外国語学習中心から、多様な教科で多様な使われ方をするようになっている。このような状況において、LLは今までのように1台のコンソールで全ての操作、活動を行うのではなく、目的別に数種のコンソールと周辺機器が開発され、それに適した部屋が作られる必要がある。そしてユーザーは各自の利用目的と能力に従って機種を選択できるようになるのではないかと予想される。その方向にLLの開発が進んだときに始めて、メーカーとユーザーとの共通の基盤ができ、ユーザーの満足できるLLになるのではないだろうか。

LLは今後、教師主導の Language Laboratory から、学生が個別学習や自学自習のできる学生主体の Learning Laboratory / Learning Resource Laboratory に移行してゆくと言測される。その時に、コンピュータの役割が非常に重要になると思われるが、

コンピュータが今後ますます教育の現場で活用されるには、担当教員や職員はもちろんのことながら、教育関係者全体のリテラシーの向上と協力が強く望まれる。

ＬＬが活用されるためには、ソフトウェアの充実が大切であることは明らかである。カラフルな映像と音声と同時に取り込め、見た目にはなやかな楽しい画面を提供できることは素晴らしいことではあるが、一方では、それらに気を奪われて肝心の学習がおろそかになる危険がないとは言いきれない。そのためにはＬＬで何を教えるのか、どのように教えるのかという教育目標がしっかりと設定されていなければならない。しっかりとした指導案にもとづいたソフトウェアの開発が望まれる。

ＬＬの管理運営体制は関係者の最も関心のあることであることが今回の調査で示された。多くの問題を含んでおり、一朝一夕に解決するものではないが、教員と職員の相互の意志疎通をよくすることが肝心であろう。管理者を含めた、全体の活動を見通せる管理体制が求められる。授業用に新しい機器を導入するときには、目的と活用範囲、管理体制を十分に考慮して導入しなければならない。

今回のアンケートで、ＬＬとネイティブスピーカーとの役割について言及する意見が繰り返して述べられた。この問題はすでに過去に何度も検討されたことではあるが、ＬＬが大きく変わろうとしている現在、もう一度検討する必要があるように思われる。その意味において、アンケート回答にもあったように、ＬＬＡが中心となって、新しいＬＬの教授法や目標を研究する研究所のような場を設立することも必要ではないだろうか。

注

1. 本研究は 1993 年度 LLA 関西支部による「ＬＬの活用と問題点」のアンケート調査をもとにしている。アンケート回答の閲覧を許可されたＬＬＡ関西支部に感謝申し上げる。また、アンケート作成時には LLA 関西支部副支部長の原田高好先生に貴重なご意見を頂戴した。
2. 本論文の第 2 著者の所属は 1994 年 4 月 1 日より同志社女子大学学芸学部英文学科である。

参考文献

- Lawrason, Robin E. 1990. The changing state of the language lab: Results of 1988 IALL member survey. *IALL Journal*, 23:2, pp.19-24.
- 竹内 理・三根 浩・佐伯林規江・枝澤康代・高原まり子. 1994. 『情報化社会と外国語教育』. 東京：成美堂
- Trometer, Ruth. 1989. 1988 IALL survey results. *IALL News Review*, 4, January.

Appendix

1993, 3, 25

LLA関西支部

アンケート：「LLの活用と問題点」について

I. 現在どのような機種を導入しておられますか？できるだけ詳しくお答え下さい。

LLマスター・コンソール：

導入年次：

機種名：

タイプ：タッチ・スクリーン、ペン・ライト方式、スイッチ方式

周辺関連機器： 導入分に ○ をして下さい

機器名：ビデオ、 教材提示装置、 スライド・プロジェクタ
OHP、 16mm映写機、 アナライザー、
カセットテープ複写機、 ビデオテープ複写機
CDプレーヤー、 レーザーディスクプレーヤー
パーソナル・コンピュータ、 音声分析装置
その他（ ）

周辺関連機器でよく使うものを3種類上げて下さい。

（ ）（ ）（ ）

II. どの教科で、どのようにLLを使っておられますか？できるだけ具体的にお書き下さい。（回答欄が不足の場合は、用紙を足すか、裏に書いて下さい。）

例：教科名： LL演習

使用目的： リスニング力の育成

使用方法： ビデオ教材とテープ教材を使い、学生テープ
にダビングする。アナライザーでテストする。

教科名：

使用目的：

使用方法：

教科名：

使用目的：

使用方法：

III. LLの使用頻度はどれくらいですか？

あなた、またはあなたの学校、教科では上記の教科で何回LLを使用しますか？

教科名： 頻度： 回／週、月、年

教科名： 頻度： 回／週、月、年

あなたの勤務する学校では何人の教員がLLを使用しますか？

ＬＬ使用教員数： 名
外国語担当教員数： 名
助手はついていますか？
常にいる 年度始めに数回つく、 必要時につく、 つかない

Ⅳ．ＬＬの機能について：

１）あなたが使用／管理しているＬＬの機能で役に立つ機能は何ですか？

上位３機能を上げ、理由をお書き下さい。

（例：倍速録音、ペアワーク、アナライザー）

_____ 理由：

_____ 理由：

_____ 理由：

２）あなたが使用／管理しているＬＬのきのうでほとんど使わない、無くても良いと思う機能は何ですか？

上位３機能を上げ、理由をお書き下さい。

（例：倍速録音、ペアワーク、アナライザー）

_____ 理由：

_____ 理由：

_____ 理由：

３）あなたが使用／管理しているＬＬの機能で改善の必要な機能は何ですか？

上位３機能を上げ、理由をお書き下さい。

（例：倍速録音、ペアワーク、アナライザー）

_____ 理由：

_____ 理由：

_____ 理由：

４）今後ＬＬに付け加えるべきだと思われる機能は何ですか？

Ⅴ．コンピュータの導入について：

１）あなたの使用／管理しているＬＬにコンピュータは導入されていますか？

Yes No

２）どういう機種のコンピュータを導入していますか？

機種名：

３）何に利用していますか？

出席管理、成績管理、板書のかわり、ＣＡＩ／ＣＡＬＬ、音声分析、
その他

４）あなたの勤務している学校、学科はＣＡＬＬ教室（コンピュータ設置教室）がありますか？

Yes 計画中 No

５）そのＣＡＬＬ教室はどのような仕様になっていますか？

（回答例：ＮＥＣ ９８ Ｖ Ｍ ３０台 １教室）

６）そのＣＡＬＬ教室は従来のＬＬとどういう関係になっていますか？

（回答例：ＬＬ教室とは切り放され、管理も別組織である／ＬＬ教室に組み込まれている。）

７）現在、ＬＬにコンピュータを導入していない場合、なぜしていないのですか？ 何が問題ですか？

Ⅵ．これからのＬＬについて：夢を語って下さい！！

１）これからのＬＬはどうあるべきでしょうか（授業と関連して）？

LL活用の現状と今後の見通し

2) 学習者のコミュニケーション能力の向上のために、どういうメディアを導入し、どのように使っていきたいと思いますか？そのときの問題点は何でしょうか？

3) 現在のLLは、マルチメディア（コンピュータ）の出現でどのように発展すると予測されますか、お聞かせ下さい。

4) ハード、ソフト、管理運営の面から、あなたにとっての「理想のLL像」をお聞かせ下さい。

VII. アンケート結果を処理中に、回答内容についてもっと詳しくお尋ねする必要がある場合の連絡先を、お差し支え無ければお書き下さい。

連絡先：氏名：

住所：

TEL：

Fax：

以上、ご協力を感謝します。